

熊田陽一郎著『美と光——西洋思想史における光の考察』

国文社, 1986年, 264頁

今 義 博

I 西洋中世の思想においてプラトニズムが重要な役割を果たしたことは周知のことであるが、本書が主題とする「光の思想」においてもプラトニズム、それも特にネオ・プラトニズムが大きな役割を演じた。ラテン的西方へのネオ・プラトニズムの流入はまずプロティノス等の初期の思想がアウグスティヌス等を通して、次いでプロクロスに代表される後期の思想が、プロクロス哲学を色濃く反映するディオニシオス・アレオパギテースの著作をラテン訳し注解したエリウゲナを通して行われた。つまりネオ・プラトニズムの全体像が西方に知られたのは九世紀半ば以降のことであった。東方でマクシモス等により確立されていたディオニシオスの権威をエリウゲナが西方に移入してアウグスティヌスの権威に並ぶものとして位置づけて以来、西方ではディオニシオスの権威は長い間しばしばアウグスティヌスのそれを凌駕する程の地位を保った。かくてディオニシオス文書はネオ・プラトニズムが西方キリスト教思想の深部に浸透してゆく一つの太い経路となった。

II このような哲学的経緯からみれば、「光の思想」に関して西洋中世の思想史を眺めるに際して、本書がディオニシオスに視点を定めたことはまことに的を射ている。その視点に立って本書はディオニシオスの「著作群をできる限り解明した後で、光の思想の系譜を辿って、光の芸術であるゴシック聖堂が競い建てられた十三世紀にまでとにかくもゆきつこうと試みたものである」。

今日まで我国の中世哲学研究は中世哲学史上の一大記念碑であるディオニシオスの哲学についてどれほどのことを探究してきたであろうか。また、ソクラテス以前の哲学者たちによって準備され、プラトンによって確立され、ネオ・プラトニズムによって完成され、中世哲学によって展開され、ついにはゴシック聖堂の成立の思想的基盤をなしたいわゆる「光の形而上学」についてどれほどのことを究明したであろうか。また、中世

思想が（ネオ）プラトニズムに対して有する密接な関係についてどれほどのことを解明したであろうか。これらの問いに積極的に答える一つの著作をいま我々は手にしたのである。本書は従来あまり顧みられなかった問題領域に果敢に取り組み、中世の豊饒な思想世界に新しい道を切り開いた労作である。この成果を喜びたい。

本書の議論は全体に周到な考証に裏付けられていて、緻密であるが、流麗な表現と論旨の明快さのために晦渋には落ちていない。

Ⅲ 本書の構成は序、第一部、第二部の主要部とあとがき、文献表の付属部とから成る。序では光の形而上学の成立と内容、ディオニシオスに至るまでの歴史が概説されている。「光の形而上学」とはどのようなものなのか。本書によれば、「光は本来、感覚を越えた精神的・神的領域において輝くものであり、われわれが日常眼にする光はこれを分有して輝く二次的光にすぎない」として「われわれが光についてもつ日常的理解を顛倒せしめ」、「この顛倒を前提として、しかも単に人間の認識作用の説明だけでなく、神と世界の形而上学的解明のために光言語が使用される場合、そこに『光の形而上学』が成立」するのである。そして著者は「光の形而上学の核心はパルメニデスによって、『在ることと知ることは同一である』と簡潔に表現されている。在ること (*εἶναι*) がそのまま知ること (*νοεῖν*) であること、存在と認識とが決して切り離すことのできないものだという、これが『光』である」と言う。しかし「光の形而上学の核心」をパルメニデスの断片 D-K. 3 に見て取ることにしてこれ以上の説明が与えられていないため、読者には不明瞭なものが解消せずに残るであろう。「核心」であってみれば、もう少し詳しい説明をしてほしいところである。

Ⅳ 第一部「ディオニシオス文書について」ではディオニシオス文書について解説した後、『神名論』の詳細な内容分析を行い、『天上位階論』の光の概念を論ずる。ディオニシオスのテキストに接するとき、たんにギリシャ語や哲学的知識の素養があるということは何の意味ももたない。そこでは根源的なものへの洞察力と思索力の質こそがまず問われるからである。難解極まるテキストを明解に読みほぐした著者の力量と努力に驚かざるをえない。近づき難かったディオニシオスの神秘的世界を望む一つの視野が拓かれたのである。しかも一連の論考は諸外国の成果を取めた上に独創を為している。我々は国際的水準に達した新しいディオニシオス研究の基準を得たのである。

Ⅴ 第二部「光の思想とその歴史的展望」ではここでもディオニシオスに視点を定め、

他にプロティノス、グローステスト、大アルベルトゥス、ボナヴェントゥラという思想家を取り上げて古代後期から十三世紀に至る「美術史の一縦断面」を展望する。次いでディオニシオスの光の思想がゴシック聖堂の成立に結実することを示し、最終章でディオニシオス美学の影響下にあるウルリッヒの美学を論ずる。寡聞にして断言できないが、ウルリッヒに関しては本研究（本書より15年前に単独の論文として著わされた）をもって嚆矢とするのではないか。著者には他に「ウルリッヒの『美について』ラテン原文との対訳」（美学史研究叢書第四輯、1978年）もある。第二部には美の学究としての著者の関心の方向と広さが表われている。光の美学への着眼そのものは目新しいものではないが、著者の感性と思索は中世美学史の俯瞰図（といってもかなり細密なものであるが）を独特なものにしている。

Ⅴ 本書がディオニシオスに視点を定めていることは述べた通りであり、その視点から源泉としてのプラトンやプロティノス等に、また後世の中世思想家に多くのことが論及されている。そうした記述を読むだけで我々は十分に哲学史的興味をそそられ、新しい知識を満喫するのであるが、しかしディオニシオスの師父として大きい存在であるプロクロスやディオニシオスをはじめ西方に紹介し自らも独創的な哲学体系を樹立したエリウゲナについてもっと言及されていれば（至難の業ではあるが）、我々は一層満足したであろう。というのも、エリウゲナについてだけ言えば、もし彼にしかるべき考察の光を当てていたならば、「ボイムカーも指摘するとおり、初期中世の思想界は『光』に冷淡であり、九一十二世紀のあいだ、われわれは注目に値する光の思想に出会うことがない」（p. 25）と述べられはしなかったであろうし、ゴシック聖堂の成立に関してエリウゲナ哲学の果たした役割についてもっと多くの重要なことが語られえたであろうからである。エリウゲナに関連してもう一言述べさせていただく。著者は「光の思想が中世初期において発展しなかった一つの理由として（中略—評者）エリウゲナの著作が、その汎神論的表現の故に教会からつねに疑いの眼をもって見られていて、ついには十三世紀初めに異端喧告を受けたというような事情もあずかっていたかもしれない」（p. 25）と述べている。確かにエリウゲナには *deus est omne.....* という類いの、それだけを取り出せば汎神論と見紛う表現がある。しかし彼はそのような表現を他ならぬディオニシオスに多くを負っているのである。例えば『天上位階論』には *τὸ γὰρ εἶναι πάντων ἐστὶν ἢ ὑπὲρ τὸ εἶναι Θεότης*. (IV. 1) とある。だから、中世初期に光の思想が発展

しなかった（このこと自体再考を要する）とすれば、その理由の一つとしてはエリウゲナ以前にディオニシオスの思想が挙げられるべきであろう。ちなみに両者は汎神論者ではないことは明記しておく。

Ⅶ 著者は「人間知性の近づくことのできない善が、その超越性を解消せぬままで、逆説的に人間に開示されるのが美体験である」（p. 148）、「神が世界と関わる仕方は『非分有的に分有される』（p. 111）などと語っているのであるから、光の形而上学には精神と物質、神と世界の間に連続と断絶の二面が共にあることを承知しているはずである。光の形而上学が形而上学である所以は光の物質性や世界性を否定して光の本来の在処を精神や神に見定めるところにあるのである。それゆえ光の形而上学の断絶や非分有の面を見失って「光の思想が必然的に孕んでいる汎神論への傾き」（p. 25）や「光の形而上学のもつ本来の連続的機能」（p. 209）を語り、「天と地、精神と物質、神の世界と人間の世界とのこの連続性、両界の自在な相互透入こそ、光の思想の風土であった」（p. 208）と述べるならば、光の形而上学を危くするのではなからうか。

Ⅷ 本書はネオ・プラトニズムについて多くのことを教えてくれる。そのネオ・プラトニズムに関する記述を読む我々読者は必ずしもプロティノスの原典などによらず啓蒙書の類いによることが多い。しかしその種の解説がネオ・プラトニズムについて真実を伝えていることは稀れである。それゆえ著者が例えばネオ・プラトニズムの重要な用語である「流出」や「発出」に言及するとき、次のような注意を喚起していただいた方が無難であったろう。「流出とか発出とかいっても、何かが一者から流れ出して来る、あるいは何かが一者の周囲に空間的に拡がって行くという意味ではな」（井筒俊彦、『神秘哲学』第二部 p. 265）いこと、「一者の創造的働きについて流出を説き発出を語るとき、プロティノスは細心の注意をもって必ず *hoion*（譬えば、いわば）の語を冠し、それが一種の譬えであり、形象化できないものをあえて形象化するための窮余の一策にすぎぬことを示している。この *hoion* の一語には実に千金の重みがある。もし我々がこの助辞を無視して、文字通りの『流出』論をプロティノスに帰するならば、彼の思想は完全に歪曲されてしまうのである」（同書 p. 260）ということは銘記されねばならない。

「還帰」と「帰還」の用語の混在が少し気になるが本書の理解に支障はない。わずかの誤植・誤記についても同様である。